

非核の政府を 求める大阪の会

非核の政府を求める大阪の会 豊島 達哉
〒542-0012 大阪市中央区谷町 7-3-4 (新谷町第3ビル 210号)
TEL.06(6765)3032 FAX.06(6765)3033
URL・http://hikaku-osaka.jp/
E-mail・hikakuosaka@hotmail.com
hikaku-osaka1986@kind.ocn.ne.jp

第185号 2018年5月1日

ニュース

被爆者の思いを引き継いで 参加して 若者として3.1ビキデーに



「核兵器禁止条約は無理だと思っていた。でも、世界では同じ価値観で動いていて、ポジティブな気持ちになった」。「本当に地道な草の根の活動が大事。日本を波に乗らせるために政治を変えないといけない」

「核兵器禁止条約」が採択された直後の青年の声。被爆者をはじめとする市民社会が世界を動かした。「無力感」「諦め」、そんな世の中の風潮・空気を打ち破る、この核兵器禁止条約までには、多くの人が闘い、この日を待ち望んでいた。私が、三年前に初めて参加した原水爆禁止世界大会でその声を振り絞って体験を語る今は亡き谷口稜暉さんもその一人。大國の脅威に言いなりにあるのではなく、世界の平和をねがう市民が歩幅をそろえてきた運動の先にこそ「平和」があるのだと、まだ「若者」と言われるこの時

に体感できたことを嬉しく思う。歴史的な核兵器禁止条約を歓迎して行われる、核兵器廃絶運動の原点である三・一ビキデー。核によって被害を受けたヒ

バクシヤの声とそれまでの核兵器廃絶を求め闘いを歴史の中から見て、聞いて、感じて学びたいと思って、初めて参加した。一日目の全体会では、和田征子さんが、「一國のためでなく、世界のために、核兵器禁止条約は批准・発効されなければならない。唯一の被爆国として一〇〇%ともに歩むのは、トランプ政権ではない、日本国民です。政府を変え、廃絶の扉を開こう」と語った。「世界のために」、まさに憲法の前文にもあるような、そんな思いが込められた核兵器禁止条約なんだと思つた。核を時には矛にし、時には盾にする、そのなかで奪われる命と自由を想像すると、核を許さないと、はっきり言い、それを広げる人間でありたいと強く思った。

- ① 非核五項目
- ② 全人類共通の緊急課題
- ③ 兵器廃絶の実現を求め、核兵器の厳守を非核三原則として核戦場への被害防止を
- ④ 日本は核戦場への被害防止を
- ⑤ 原水爆禁止世界大会の開催を強化

韓国の外交努力はトランプ大統領をけん制している」と語り、韓国は「米韓合同軍事演習の中止が至急の課題」。危機を回避するには米朝の前提なしの対話が必要であり、韓国と北朝鮮はそれをやろうとしているし、米朝もできる。かつて核の時代を生き抜いた反核運動の糧、今こそそれを發揮すべき」と、声高らかに語られた。世界の生きた情勢が、日本だけの核廃絶運動ではなく、世界と結びついて進んでいる運動であると実感した。

民青大阪府委員会常任委員 林 裕也 (続き次号)

非核大阪の会春の恒例
京大複合原子力研究所 **見学**



今年の京大複合原子力科学研究所(今年三月末までは京大原子炉実験所)、原子燃料工業熊取事業所、大阪府オフサイトセンターの見学会への参加者は一名。うち初参加者は四名でした。
今年、運転中の原子燃料工業で、実際にペレット加工工程の一部(ウランの粉末をプレス↓焼結↓研磨↓検査↓完成)が見学出来(約一〇年ぶりの実施とのこと)、また、京大複合原子力科学研究所では、従来の原子炉のほか、今まで行ったことなかった「イノベーション

ンリサーチラボラトリー」のFPGA加速器も見学しました。

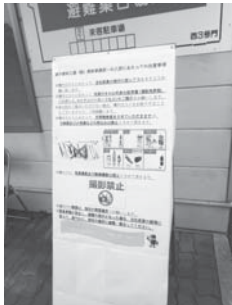
熊取 スタンダードを福島や全国の原発周辺へ

ピースに声を！実行委員会事務局(元大阪府立中学校教員)

増井茂美

四月七日(土)、非核の政府を求める大阪の会主催の京大熊取原子炉見学会に行ってきました。

私は、ピースおおさかりニューアルの二年ほど前から、その動きに憂う団体や個人が、「ピースに声を実行委員会」を作り、その事務局メンバーをさせてもらっていました。非核の会も当初からここでも積極的に動いてくださり、そのお付き合いの中で参加させていただきました。



この熊取の原子力関連施設には三つの顔がありました。一つ目は、

京大大学の「複合原子力科学研究所」(旧「原子炉実験所」)からこの四月一日から改組で、実験用原子炉と中性子発生装置棟(ライナック棟)が主要設備であり、戦後の大学の民主的な流れを受け継いで、原子力の平和的な研究と利用を軸に半世紀余り動いています。二つ目は、原子力燃料工業株式会社熊取事業所で、日本の原子力発電所で使用するペレット(ウラン燃料そのもの)を製造し、全国の稼働している原発へ出荷しています。(ここでは、加圧水型用のペレット。沸騰水型は、同じ会社の東海市の事業所で製造) 三つ目は、大阪府熊取オフサイトセンターで、府が運営主体だが、国の原子力規制委員会が大きくかんでおり、原子炉があるところには必ず事務所があり、ちなみに、東大阪に近大の原子炉(1W

AT)があり、オフサイトセンターもちゃんとある。

三つのどこの職員、関係者からも、「福島原発事故の教訓を踏まえて、二度と繰り返してはならない。被爆は避けよう」「核兵器の製造や核戦争につながるようなことは絶対にしない」と言う思いは十分に伝わってきた。見学者にも、放射線被ばくなどができるだけないように、十分すぎるほどのステップとレクチャーがあり、周辺や地域住民を第一に運営している。しかし、三つの施設は、その性格が根本的にちがう。そのことも踏まえて、関係者すべてが真剣に取り組んでいるかと言うと、「No」と言わざるをえない。

なぜ、「No」か。この間の新聞でも、「三二年後も原発維持」というとんでもない発言が普通に報道されている。そのような認識の枠内ならば、十分すぎるほど「Yes」だろう。原子力燃料工業株式会社熊取事業所は、ペレットを生産し、各地の原発はこの工場がないと動かない。政府諸機関が、原発の再稼働を認めても、ここが止まれば……。京大原子炉は、実験炉と言う特色を生かして、医療や様々な分野で多くの成果を上げてきたが、研究のいくつかは「安全な原子炉」「安全な核燃料サイクル」とのきわどい崖っぷちに思えた。オフサイトセンターも、大規模な原発とこの実験炉では、明確にスタンスを変えなければならない、どうも、「悪しき一律」に思えた。

熊取は、この原子力諸施設を誘致することで、町の財政も潤い、快速電車も止まり、住宅地、学園都市として新たに発展することができ、まさに「安全、安心、快適」な街になった。原子力施設周辺住民が安全、安心で暮らせることを、この熊取の住民が実感する基準で、全国の原発や、福島の被災地にあてはめたらどうなるだろうか。熊取の「安全、安心、快適」を全国に、そんな思いを三つの施設の職員全員がもっていただければと思った。私も含めて「原子力の平和利用」という理想や夢もあったが、福島の原発事故、プルトニウムの難しさ、北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)の核とミサイル問題で、今までの常識がことごとく覆されてきた。さらに、フェイクがふつうのように、マスコミやネットで流される世の中で、かなり危うい諸説が平気で流される。「実際に行ってみて、いろいろな人とふれあい、聞いて、考えて、……」の大切さを改めて感じた一日でした。

一日、丁寧に案内してくれた、非核の会の方、元職員や教官であった岩本さん、松山さんありがとうございました。来年もよろしくお願います。

「宗教者の重要な役割」とは

シリーズ No.7
宗教者と非核平和
真宗大谷派僧侶
◎ 村山博昭



私は、真宗大谷派の僧侶として、お参りに伺い、いろいろな人とお話をさせていただいています。人それぞれの人生があり、嬉しいこと、悲しいこと、つらいこと、感動したことなど、本当にいろいろなことがあります。その中で、先の第二次世界大戦を経験された方の多くがおっしゃるのが、「今まで生きてきた中で一番つらかったのが、戦争です。」ということだと思います。この言葉は大変重みがあると思います。しかも日本の場合、ヒロシマ、ナガサキに原子爆弾が投下され、一瞬のうちに

死傷者が二〇万人を超え、都市は破壊されました。戦争でも多くの人の命が失われますが、核兵器が使用されれば、犠牲者の数は比べものにならないくらい多くなります。ところが、世界で唯一の被爆国である日本の政府は、核兵器廃絶に対する後退姿勢を示して、少なからぬ国々から公然たる批判を浴びています。

核不拡散条約(NPT)合意にかかわる「核兵器の全面廃絶に対する核兵器国の明確な約束」の表現をあいまいにする一方で、「核なき世界の実現に向けて様々なアプローチがあることを念頭に置く」との表現を盛り込み、核兵器禁止条約に反対する日本の立場を正当化しています。こうした日本政府の後退ぶり、核兵器に固執する米国への配慮によることは明白です。私は、被爆国にふさわしい非核の政府の実現を強く望みます。正しくない(悪い)ことを行おう

として、個人や団体に對して、正しくない(悪い)ことをやめて正しい(良い)ことを行うように意見を表明することは、宗教者の重要な役割だと思います。これからも、核兵器廃絶を目指して活動する決意です。

非核と科学 No.6

原発と原爆の同異(1)

〜どっちも原理は同じ〜

◎ 松山奉史

核分裂とはウラン(U)やプルトニウム(Pu)のような重い原子核が、質量があまり変わらない二つ以上の原子核に分裂する現象で、核反応の一種です。核分裂を起こす性質をもつ原子核を核分裂性核種といい、U・235、Pu・239などのことです。これらの原子核には外から手を加えずとも自発的に分裂する確率もあります

が、外から中性子、陽子、α粒子、γ線などで刺激(照射)すると分裂が起こりやすくなります。また、分裂にともなう二〜三個の中性子が新たに放出される性質があるので、この中性子を外部刺激として再利用すれば次の新たな核分裂を誘起することができず。

この過程を繰り返して連続させた状態を連鎖反応と呼びます。ところで、核分裂を発見したのはドイツのオットー・ハーンで一九三八年のことです。ウランに中性子をぶつける実験で発見し、アインシュタインの有名な公式を用いると、一つの核分裂で約二〇〇メガ電子ボルトのエネルギーを放出することが明らかになりました。このエネルギーは莫大で、通常の化学反応(燃焼)で放出されるエネルギーの約一〇〇万倍に相当します(等重量で比較)。誇張かもしれませんが、この核エネルギーを利用すれば世

界のエネルギー問題は永久に心配しないで済むだろうと思われるほどの画期的な大きさなのです。

ところが、このエネルギーを実用化するための本格的研究の開始は原爆開発という軍事を目的としたものでした。開発に成功した原爆は一九四五年に広島と長崎に投下され、人類に大きな災いをもたらしたことはご存知の通りです。次に研究されたのは潜水艦用の動力源としてで、軽水型原子炉が開発されました(一九五四年)、そして、軍事用に開発した

この原子力潜水艦用原子炉を商業用発電炉へと転移したのが、現在の原発の出発点となりました。

上で述べたように、原発と原爆は核エネルギーを利用するという点で原理的に全く同じであり、実用化の原動力は軍事研究にあったことも共通しています。とはいえ、電力生産のための原発と兵器としての原爆とは何から何まで全く同じであるというわけではありません。次回以降もしばらくの間、科学的な視点から両者の同異について述べる予定です。

【ヒパクシャ援護・連帯活動のお知らせ】

5月10日(月)14:00 806号法廷

地裁 第7民事部 本人・医師尋問

5月16日(水)14:00 1010号法廷

地裁 第7民事部 本人・医師尋問

6月2日(土)13:30 大阪グリーン会館

『ノーモア・ヒパクシャ近畿訴訟全面

勝利をめざすつどい』

6月20日(水)15:00 1007号法廷

地裁 第2民事部

※ 傍聴活動などにご参加ください

【国民平和前行進のお知らせ】

6月30日(土)11:45 柏原市役所(大和

川河川敷)集合・・・八尾・東大阪

大阪府下、平和行進(詳細は原水協HP)

※7月7日(土)兵庫・川西に引き継ぐ

新任常任世話人を紹介 非核の60年 思い

吉井英勝

私が育った京都市左京区は、「反戦・平和」「革新・民主」の気風の強い地域でした。子供の頃は、テレビなどと言うものは展示場で試験機を見るくらいなもので、目や耳から入ってくる情報は、小学校の校庭で行われた「納涼映画会」などで映された映像でした。新藤兼人監督の「原爆の子」や今井正監督の「ひめゆりの塔」などが上映されて、原爆への怒り、沖繩を「捨石」にして県民を犠牲にした軍部への怒りが生まれてきました。

中学校に入った一九五五年の夏休みに、円山公園の野外音楽堂で第一回原水爆禁止京都集会が開かれました。知り合いの法律学研究者に連れて行ってもらいました。初めて大きな集会に参加したというだけで、あまり中身

は覚えていませんが、当時の参議院京都選挙区で革新統一の議員となっておられた大山郁夫先生と立命館大学総長の末川博先生のお二人の名前だけ記憶しています。末川先生の「青年よ、未来を信じ、未来に生きよ」と講演の最後を締めくくられた言葉が、いまも頭の中に鮮明に残っています。

当時の立命館大学（広小路校舎）のすぐ近くに府立鴨沂高校がありました。私はここで、「自由」の伝統を持つ学校に誇りを持って、勤評闘争や六〇年安保闘争を闘い、「軍国主義教育の復活を許さない」、「日米安保条約」で軍事的にアメリカの属国として縛りつけられ、アメリカの「核兵器」で「守って貰っている」などという卑屈な戦後政治の誤りをただしていきたいと立ち上がりました。

六〇年経ったいまも、北朝鮮問題をはじめ、核兵器を廃絶する大事な時期になっています。

皆さんとご一緒に大きな非核の世論を作り上げる取り組みをしたいと思います。

川崎哲 さん 語る ICAN ノーベル平和賞受賞と被爆者の証言

～核兵器禁止条約を
生かすために～



四月一六日、大阪市内で「ヒバクシヤ国際署名推進・大阪の会」主催の「被爆者の証言とノーベル平和賞受賞・ICAN川崎哲さん語る」が一六〇名の参加者で開催されました。中北龍太郎氏の主催者あいさつののち、九一歳の被爆者末広千鶴子さん(天王寺在住)の一八歳の時に広島で被爆した時のお話を、



四月一六日、大阪市内で「ヒバクシヤ国際署名推進・大阪の会」主催の「被爆者の証言とノーベル平和賞受賞・ICAN川崎哲さん語る」が一六〇名の参加者で開催されました。中北龍太郎氏の主催者あいさつののち、九一歳の被爆者末広千鶴子さん(天王寺在住)の一八歳の時に広島で被爆した時のお話を、

枚方市原爆被害者の会会長の森容香さんの爆心地一・八キロで被爆したお話しと大阪の会呼びかけ人としての運動推進の訴えがありました。

そのあと記念講演としてICANの国際運営委員、ピースボートの共同代表の川崎哲さんの「核兵器禁止条約を生かすために―今後の課題―」と題してのお話がありました。昨年のノーベル平和賞受賞の際のエピソードをスライドを交えながらの

お話は、「核兵器禁止条約」が国連の場で採択された歴史的意義をあらためて学ぶものでした。講演は、さらに「核兵器禁止条約」の条文を詳細に解説、従来のNPT条約とは違って、核兵器をなくすために必要な内容を網羅した極めて重要な条約であることを強調され、朝鮮半島の非核化の問題も「核兵器禁止条約」を活用することが「対話による解決」の最も有効で現実的であると強調。今後の課題として

- * 第一の課題 署名・批准の促進
- * 第二の課題 核兵器禁止条約の存在についての広報・教育
- * 第三の課題 核の傘下国の核政策に核使用・威嚇の「援助、奨励」を批判
- * 第四の課題 将来的加入を視野に入れた関与
- * 第五の課題 企業・金融機関への働きかけを提案されました。